

「コノハチョウとの出会い」

※実は「アケビコノハ」という蛾でした！

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーション研究所 研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

小学生の頃、「蝶の標本」が部屋にあった。一般的な昆虫標本とちがって、薄い透明塩ビシートのようなものに、何十種類ものチョウの翅が挟み込まれている。中央の体はカラー印刷された「偽物」だったが、翅は本物で、それぞれの種に和名と学名が記されているというものだった。どこかの博物館か何かのおみやげだったか、親戚の人にもらったか、入手の経緯は記憶がない。それが、トイレの壁にデカデカと貼ってあったので、いやでも毎日眺めるので、次々とチョウのなまえを覚えたものである。野外で生きた実物を見つけると、とても嬉しくなったものだ。「元素周期表」とか「生き物の一覧」はトイレの壁に貼っておくと、効果的だと今でも思っている。

その「実物の蝶の翅ポスター」の優れたところは、それぞれのチョウの翅の「表と裏」をそれぞれ並べているところだ。ほとんどのチョウは、翅の表（翅を広げているように見える側）よりも、翅の裏（翅を閉じている時に見える側）のほうが地味なことが多い。そのちがいがよくわかる標本だったのだ。

その中に「コノハチョウ」の翅もあった。表は非常に鮮やかな翅色と模様だったが、裏側はどうみても「茶色い落ち葉」にしか見えなかった。一度「生きたコノハチョウ」を見たいと思っていたが、私は子どもの頃から、今の今まで一度も見たことがなかった。ところが、その「出会い」は実につまらない場面で訪れたのだ。



8月下旬の夕方、職場の自転車置き場に行くと、私の自転車のサドルの金具の隙間に、茶色い落ち葉が挟まっている。指で払いのけようとしたら、それは「飛んだ」のだ。しばらくひらひらと舞って、廃棄物置き場のラックの下に止まった。



私は全く疑いなく「枯れ葉」だと思ったのだ。恐るべき「擬態」である。近づいてみると、「枯れ葉の色」「葉脈」それに「虫食い跡」まで見事に「表現」している。鳥類から身を守っているのだろうが、ここまで「精密」に再現する必要があったのだろうか？



捕まえて翅の表も見たかったのだが、逃げられてしまい、天井近くの壁で死んだように動かなくなりました。よく調べてみると、コノハチョウは沖縄など温暖な地方のチョウで、本来関東地方には分布していないとわかった。昆虫愛好家のカゴから逃げ出したのか、気候変動で分布を広げたのか、或いは別種なのか、新種（ブンキョウコノハチョウ）なのか？謎である。

※露木和男先生の同定で、「アケビコノハ」という蛾の一種と判明しました。お詫びして訂正いたします。